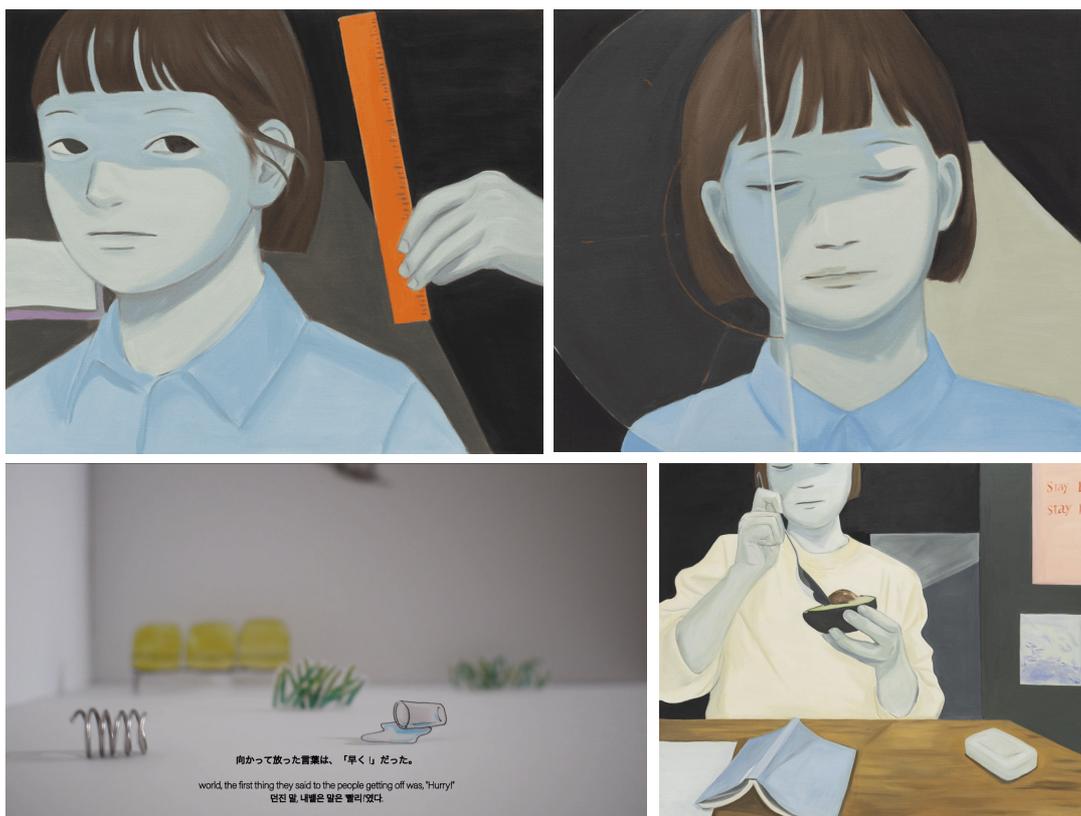


美術専攻 洋画研究領域

ゴトウ ミズホ

後藤 瑞穂



/avocado series

油彩、カンヴァス / 映像

/avocado series

人は自分ではどうしようもない状況になったときにどのような行動をとるのか。この問いをテーマに、歴史的な出来事のリサーチから作品制作を行っている。戦争や大きな暴力、病などに直面した時、人はどういった行動をとるのか、どのような言葉を発するのか。それらが心身に与える影響を自身の日常に重ねて表現している。

これまで、戦争における支配と抑圧の歴史や暴力、痛みをリサーチして油彩画で表現してきたが、フィルター的なものを1枚挟んだ状態である映像の方が心地よいと思うことが増え、映像作品も制作するようになった。戦争の歴史資料や写真を引用することが多かったが、最近は周縁化された人々の歴史や文学作品のリサーチによる制作に変化してきた。

私は2年前に特発性間質性肺炎という肺疾患のため脳死両肺移植の手術を受けた。特発性間質性肺炎にはいろんなタイプがあるが、たとえ同じタイプでも人によって症状は違ってくる。私は息を吐くことより、吸うことが困難なタイプだった。悪化する前は、自分がいかに息苦しいか認識できていなかったが、手術を経て、はじめて自分がどれくらい息苦しかったのか気付いた。そして、戦争によってひきおこされた暴力と加害の歴史をいまだに引きずっていることが、現代の日本に生きる私たちの生きづらさと繋がっているのだと知ったとき、息を吸えなかった時の自分と重なるように思えた。鉛のように重い身体の記憶、倒れた少女、ものさしを持つ手や地面に転がるアボカドといった、日常の小さな動きを社会問題や歴史的な出来事とリンクさせることで、軽やかで隠喩的な画面を目指している。

現実世界では性や身体は戦争や暴力、差別と強く絡まり合い、私たちの日常に根を下ろしている。そのことを作品として提示し、ひとつひとつの事象と向き合い、この社会状況に抵抗し続ける制作活動をしたい。